


# 逍遙館長のところ

「『今に、そしてこれからに』生かす歴史と『もしも』のころ」

2月8日 逍遙 

幕末期における政治的な立場は？と問われれば、大きくは三つ、一つは「倒幕派（含、討幕派）」、もう一つは「佐幕派」、そして三つめはその中間の「公武合体派」でしょうか。島津斉彬は、正にこの公武合体派でした。

そして斉彬亡きあと、その遺志を継いだ弟の久光の下で、西郷らが、「公武合体派」の代表格である「薩摩・島津久光、越前・松平春嶽、土佐・山内容堂、宇和島・伊達宗城」による「四侯会議」実現に向け、謁見のため四国に赴くなどの動きを始めたのが今月2月。そしてその年の5月にこの「四侯会議」は8回も開催されましたが、慶喜側との主導権争いから、結局この「四侯会議」は、3年前の「参与会議」同様、またもや挫折。ここに至り、薩摩の首脳陣も「公武合体」を諦めざるを得なくなったのです。

逍遙館長的に思うのは、もしこの「公武合体」が成立していたなら、その後の日本は、そして鹿児島は、果たして、どんな歴史を刻み？、今は？、そしてこれからは？ということ。失わずに済んだものもきっと多かったはず。

◎ 次回の予定 「西郷隆盛・魂の旅路、のころ」

